

大分県 現代俳句協会 会報

第125号

令和4年5月31日



現代俳句歳時記 【十葉（ジュウヤク）】

葉に特異な臭気を持ち日影にはびこる多年草である。葉・茎・根に薬効があり毒消しの意から「どくだみ」、何にでも効くから「十葉」と呼ばれるようになった。十字の花に見えるのは、花ではなく総苞。

十葉の芯高くわが荒野なり

飯島晴子

第32回大分県現代俳句大会 選句集計進む 過去最多の632句 うち会員外が234句

4月15日締切の第32回大分県現代俳句大会には合計632作品が寄せられました。これは県内募集の俳句大会としては歴代一位だった昨年の558を上回るもので、この数字を更新しました。

※投句総数

昨年558句

(121名)

本年632句

(135名)

※会員の投句

昨年386句

(74名)

本年398句

(77名)

※会員外の投句

昨年172句

(47名)

本年234句(58名)

以上のようにすべての指標で前進できましたが、特に会員外の顕著な増加は、ここに力を注いできただけに嬉しいことでした。これは当協会



が掲げている「地域の俳句文化向上に寄与すること」に直結するからです。まだまだ緒に就いたばかりの成果ですが、多くの会員外俳句愛好者と当協会が日常的に

影響を与え合っているかなければ、当協会の勢力も尻すぼみになります。私たちが働きかけないと、会員は自動的に増えません。県現代俳句大会はそのバロメーターになっています。

昨年に続き大会の特典としたコメントの希望者は、昨年24名に対し本年は33名で、こちらも大きく

前進しました。会員外の方の中に「俳句を知りたい、俳句が上手になりたい」と希望する人が多い事が裏付けられます。この層こそが当協会の未来を決定します。全力でこの層に働きかける必要を感じました。

第24回 大分県現代俳句協会賞

福田 英子氏「虎落笛（もがりぶえ）」

準賞に稲田久美子氏「饒舌のあと」と甲斐加代子氏「道草」

順位	応募番号	タイトル	作者	有村王志	河野輝暉	谷川彰啓	上田たかし	伊藤利恵	河野則子	合計点	賞(案)
1	7	虎落笛	福田 英子		5			5	5	15	協会賞
2	8	饒舌のあと	稲田久美子	3	3		1		4	11	準賞
2	22	道草	甲斐加代子	3		5	3			11	準賞
4	11	淀みなき指	本田 圭子	3			2	5		10	敢闘賞
5	4	風が吹く河原	飯田 幸子		4				3	7	奨励賞
6	17	激動の昭和を	下司 正昭				5			5	奨励賞
6	19	曼珠沙華	灘波 瑞枝			4		1		5	奨励賞
8	2	大根の花	井上 治		1	3				4	奨励賞
8	13	きょうの虹	陣野千恵子				4			4	奨励賞
8	15	ソクラテスの妻	平田千代子	2				1	1	4	奨励賞
11	16	侘助	原田 勝子	3						3	奨励賞
11	23	ぼかーんと青	松廣 李子					3		3	奨励賞

大分県現代俳句協会賞は当協会の事業の中で最も重要なもののひとつです。当協会創立の1991年にスタートし（授賞は翌年）、第1回の受賞者は成清正之顧問でした。それから途中に6年間の休止期間はありましたが、前回までで24名の協会賞受賞作家を輩出しています。

この協会賞は当協会が目指す俳句の方向性を内外に示すものであり、同時に当協会の質的向上をはかるものです。新入会員が多い現在では教育活動の一環であることが重視されています。

今回の第24回大分県現代俳句協会賞には23組の応募があり、当協会発足時の高揚を彷彿とさせました。選考委員は上の表の通りで、今回から河野則子氏が増加されました。氏は第16回協会賞の受賞者です。成清正之顧問、あべまさる副会長は病气療養のため選考委員を辞退されました。

今回の特徴的なことは、応募者に大きな実力の差がなく、得点が偏在していることです。一席と二席もかつてない接戦と言えるものでした。

応募23組に対し選考委員が選べるのは例年とおりの「一人5組以下」です。応募者による作品の並べ方やタイトル、選考委員のわずかな体調や気分が順位は変わっていたかも知れません。昨年までの奨励賞作家が、今回は選外に、あるいはその逆にということが起きています。得点の入らなかった作品が、入った作品よりも明らかに質が落ちるということではありません。「運」の要素が例年よりも多くなっている気がします。

しかし賞に応募するということは、もともとこういうことです。納得いく評価を得た方も、それ以外の方も緒戦の評価で一喜一憂することなく、次回に挑戦していただきたいと思えます。また今回は応募をためらった

方も、協会賞の応募など考えていない方も、次回はぜひ挑戦してみてください。大きな賞に応募することは相応の葛藤があると思いますが、それだけに自身が大きく成長するチャンスです。自信のなかった作品が意外と評価が高かったり、逆に自信作がさんざんな低評価であったとしても、それ自身が勉強です。嬉しい思いをすれば、あるいは悔しい思いをすれば、俳句は必ず上達します。自分の実力は自分自身では分かりにくいものです。自分を知ることのできる勉強ができるようになります。

協会賞に応募することは自分が向上するだけでなく、協会の勉強の気運を高めることにもなります。

大分県現代俳句協会賞は例年8月に募集され10月末が締切です。一年間の未発表、既発表を問わず20句が対象で、句の並べ方、タイトル等も評価の対象になります。花束にたとえるならば、一本一本の花の出来映えだけでなく、花束としての見映えも審査されるということです。次回に向けて今から準備をしましょう。

今回、第24回協会賞は上の表の通りに決定しました。今回は2008年以来実に14年ぶりに準賞が復活し、二人が受賞しました。

第24回大分県現代俳句協会賞 Ⅱ 受賞作品 Ⅱ

虎落笛

福田 英子

柿若葉みな持つ仏喉仏

土踏まず踏まめ絵踏の黒光り

消息を問へば秋天指しにけり

亦スビスの小川に生れし目高かな

啞蟬や少女上手に嘘泣きす

冬耕や一畝遠く世間置き

持て余すキリンの首や大西日

山姥の見下ろしている花見かな

しじみしじみ廿行のさみしじみ汁

鳴き声を聞かれ恥入る海鼠かな

みな去んで仏とわたし盆の月

だれれも羨ないオノノウータノ口永かな

人攫ひの銜ふ煙草や秋の暮

死んだ子を又用水に沖縄忌

けふ一日人を憎まず桃を剥く

酔熟し二十の黄泉路鼈猫

草餅や赤子の尻の蒙古斑

パスポートと菜の花入れむ吾が棺

葡萄吸ふその一瞬の孤独かな

淋しがる人を攫いに虎落笛

【準賞】

饒舌のあと

稲田久美子

お茶席の黒子で通す野紺菊

控えめな夫の暴言石露の花

七五三帰りは父の背で眠る

少子化が加速していく冬の雨

家計簿に足をすくわれ初日記

薄水を足で潰して不登校

蛇穴を出て子どもらに囲まれる

卒業の来賓席に椅子がない

陽炎やいつの昔にもどろうか

ぼうたんの花に溺れて黙り込む

立夏へと放る白球 ストライク！

全員の目が一匹の蠅を追う

田植えて畦まで遠き左足

片耳で蚊を追っている眠りばな

饒舌のあとの沈黙ビール注ぐ

店先のメロン見られたまま昏れる

オノヨーコめく百均のサンダラス

ぼんと音たてて朝顔開きけり

悪態のあとの後悔夜半の月

晩年は月の沙漠で果てようか

【準賞】

道草

甲斐加代子

大且素顔のまままで生き通す

小雪舞う宿のもてなしハンダグ語

絵手紙をはみ出しながら野火走る

わらび野は今も私の指定席

杉の秀に昇りし藤の孤独なり

生涯は道草ばかり春りんどう

追伸を添えて見送る花筏

七癖と上手くつき合う夏あざみ

あたらしき涙と出合う終戦日

晩年の橋どの辺り千日紅

歳月をころがしながら飲むラムネ

この風は父かも知れぬ青田風

字余りをたたみきれない秋海棠

小望月むすび忘れし靴の紐

針穴に通れぬ糸の秋思かな

吹く風に向き合うのれんななかもど

もろこしの芯までかじる俳句論

祈ること多過ぎますよ今日の月

思い出を束ねた先は稲架襖

自分史を少し美化して秋灯下

《受賞の言葉》

福田 英子

このたびは権威ある大分県現代俳句協会賞を受賞することになりました。身に余る光栄と思っております。本当にありがとうございます。また選考にあられた諸先生方から感謝しています。

俳句に出逢えて良かった、とつくづく思うこの頃です。俳句に出逢えたおかげで、わたしの世界が広がりました。「世界で一番短い文学」というキャッチフレーズに惹かれて始めた俳句に、今はどっぷり浸ってお



ります。

「無人島に行くなら何の本を持つていく?」「棺に入れてもらうとすれば何の本?」という昔聞いた難題があります。その答えを今なら「歳時記」と即答できる私があります。た

だし五分冊のものは重いので、一冊にまとめた軽い歳時記がいいかしら……などと想像するのも私にとつての楽しい時間です。

これからも河野輝暉先生のご指導を受けながら、国東俳句会のみなさ

まと一緒に五・七・五のことば遊びで心豊かに過ごしていきたいと思えます。頂いた賞を糧に、多少の心の哀しびと諧謔を持ち続けながら。

みなさま、本当にありがとうございます。

第24回大分県現代俳句協会賞・各選考委員選評

各選考委員の先生方から事務局に寄せられた選句と選評を、到着順に掲載します。なおその時点では各作品の作者名が分かっていないので、あとから事務局で書き加えました。

つぶぞろいの力作

順位と採点は以下の通りである。

一位 (5点) 7番 「虎落笛」

福田 英子

二位 (4点) 4番 「風が吹く河原」

飯田 幸子

三位 (3点) 8番 「饒舌のあと」

稲田久美子

四位 (2点) 12番 「母百六歳コロナ禍を生きて」

安森 範明

五位 (1点) 2番 「大根の花」

井上 治

河野輝暉

一位 虎落笛 福田 英子

活達な面白さで読者を振り回す力が粒揃い。肉体を通した日常性の中の文芸的飛跳と意外性あり。諧謔をアウフヘーベンし平明なリズムが生動して当協会の好モデル句群だ。

二位 風が吹く河原 飯田 幸子

誰にも在る潜在意識を縦横無尽に発掘した作品は広く共感を呼ぶ。手馴れた表出でいて俗に墮してないオリジナリティとユーモア。語彙の豊富さが情緒を後発している典型。

三位 饒舌のあと 稲田久美子

標題が良く句群を象徴。言われてみれば誰にもある饒舌の内容を俳句へ濾過して、どこか悲愁を漂わせている。

四位 母百六歳コロナ禍を生きて

安森 範明

選考にタイトルも含むといえ、長過ぎた。作者は中学生時代から作句に興味を持ち進歩の方は遅々としていたが、継続は力の模範。百歳時代の母子の情愛が切実かつ麗わしい。

五位 大根の花 井上 治

産土に足を付けた泥臭さこそ作句の地盤、と言う趣旨の兜太晩年の主



張を思わせる句の展開に好感を持つ。正に「大根」に花開いた俳句達だ。老いし身、離農、余命、などの語に時代背景と作者の悲哀が語られ、正直さが芸になった。やや類想的な凡句もあり精選の事。

《総評》

第24回の今回、23組の応募者があり、執行部の熱意に「応えてくれた方が思いのほか多く」とのこと。

選と評とに約7時間かけたが作品は甲乙つけ難しの証。注意点を感じたのは、類想的、説明過多、推敲と選句力不足が共通点で、是正には、秀句を広く読み知り、そして捕らわれずに個性を发出すること。

東京の俳人で、平成29年に百六歳で没した金原まさ子氏は「私がおし無人島にいたら、俳句は作りません。読者の反応、共感、会話に飢えがあるんです。読んでくれる人がいなければ、俳句は一文書けません」と言う。みなさん、当協会にて句集を共にしましょう。

完

作者の内面の照射

有村 王志

二十三纂に及ぶ多数の方々の御応募を戴き各位に厚くお礼申し上げます。既発表句ということもあります。が、やはり二十句の集積を読みますと、各々の特色・映像などが表出されておりました。

今回は次の作品を「協会賞」として選出しました。

二十二番 道草 三点

甲斐加代子

絵手紙をはみ出しながら野火走る
わらび野は今も私の指定席

歳月をころがしながら飲むラムネ

この風は父かも知れぬ青田風

作者の内面の照射がしっかり言葉

になつて表れている。野火走るの力強さ、指定席などの安定性などに作者の表情が示されて心強い。

八番 饒舌のあと 三点

稲田久美子

少子化の加速していく冬の雨

薄氷を足で潰して不登校

オノヨーコめく百均のサングラス

晩年は月の沙漠で果てようか

少子化や不登校などの社会への社

会性とまでは言わないが、その告発。また、オノヨーコと百均との配合の妙に惹かれる。

十一番 淀みなき指 三点

本田 圭子

フリージアの似合う家です空家です

シクラメン夢のかたちに燃え残る

きしきしと新聞で拭く暮の窓

牡丹一輪こんなに長い父の留守

身近な生活詠が詠まれており好感。

きしきしと新聞で拭くの措辞は思わぬ形で新鮮に映った。

十六番 侘助 三点

原田 勝子

今日性を加味して

主として今日性を加味した、意欲的で少しでも新しい試みを感じられた作品を選出の基準とした。

一位 道草 五点

甲斐加代子

わらび野は今も私の指定席

生涯は道草ばかり春りんどう

病葉に背中押されて居る余生
侘助や息を潜めて老いてゆく
通り雨甘さ苦さもつれてゆく

人生の哀歎、感慨を丁寧、しつかりと切り取っている。今後を期待する。

十五番 ソクラテスの妻 二点

平田千代子

かさかさと思考回路を舞う落葉

無言とは寺の箒目冬至粥

生国の訛で来たる空つ風

対象物に自己投影の形象化がある。

生国の作品には他にない力強い実感の中で屹立する姿が覗える。

このほか

七番「虎落笛」・二番「大根の花」
の質実な措辞が魅力。

谷川 彰啓

追伸を添えて見送る花筏
あたらしき涙と出会う終戦日
字余りをたたみきれない秋海棠

二位 曼珠沙華 四点

灘波 瑞枝

過疎の村解体進む鳶の家

草を抜き父の愛した田を守る

日向ほこみすゞの世界へ深入りす
着膨れて余生暇なく暮れて行く
はかなきは人も落葉も散る運命

三位 大根の花 三点
井上 治

新緑を揺する令和へ望みあり
蝉の声聞いて余命の指を折る
木屋の香に包まれている故郷

四位 地図の旅 二点
佐々木 玉

あるがまま激みに浮かぶ落椿
半島の地図をふるわす桜東風
凌霄花未だに過去を引きずりぬ

五位 蝉しぐれ 一点
田代 直之

七歳の姉の遺影に聖夜来る
表札の残る空家に春の雪
麦青む掩体壕の宇佐平野



ふっと息を抜く構成の妙 河野 則子

1位 7、虎落笛 5点

福田 英子

2位 8、饒舌のあと 4点

稲田久美子

3位 4、風が吹く河原 3点

飯田 幸子

4位 18、少女の羽根 2点

神 慶子

5位 15、ソクラテスの妻 1点

平田千代子

1位 虎落笛 福田 英子
柿君葉みな持つ仏喉仏

この句は日野草城の「春の灯や女は持たぬ喉仏」を連想した。応募句は「ジェンダーフリーの風潮として読んでみた。」

全体的にすわりのよい句が多かった。定型で親しみやすい句で、句歴の永い人と思われる。句の並べ方にも工夫があり、定型の間に字あまりの句を効果的に並べて読み手の心を捕らえている。

俳句は作者と読み手の双方で完成するとよく言われます。作品群はこの様に型から少しはみ出して嗜み、ふっと息をぬいた俳句を混ぜている

ところが面白かった。

2位 饒舌のあと 稲田久美子

片耳で蚊を追っている眠りばな

全員が目が一匹の蠅を追う

ユーモアと人間臭さが俳句文芸の

独自性を高めている。蚊や蠅をこ

まで俳句に作り上げる作者の今後が

楽しみです。

3位 風が吹く河原 飯田 幸子

俳句を読む場所が点々と変ってゆく様子が沢山の物を見て、実体験の裏付けがあり、共感する句が多かった。強さ、優しさ、ユーモア、悲し

平和への希求

一位 激動の昭和を 五点

下司 正昭

戦前、戦後における昭和時代の社会情勢を見事に描写しており、読む人の心を捉えて離さない。全ての句に平和への希求が込められている。

次の句に惹かれた。

学帽の銃の行進黄落葉

あの夏を壕に飛び込む小国民

さ等が読み込まれている。

全体的に訴求力がやや弱かったのではないでしょうか。

4位 少女の羽根 神 慶子

タイトルの様に美しい光景が目

前に浮かんでくる。自分の居場所を

自らの幸せな所と見なし、俳句を作

る事で幸せ感を作り出している。例

えば次の句など

冥界へ迷い込む道夕桜

過ぎ去れば良いことばかり難飾る

5位 ソクラテスの妻 平田千代子

日常のふとした動きに目を向けながら、宇宙基地なる新しい分野を取り入れた。タイトルも興味深かった。

上田たかし

小鳥来る手に赤旗の引揚船

激動の昭和を生きて柿落葉

二位 きょうの虹 四点

陣野千恵子

やさしい文体で負いが見られない。タイトルにも親しみを感じる。

句全体が読後に快い余韻に浸ることができる。次の句が印象に残った。

冬服を脱ぐときのつべらぼうになる夕立ちを味方につけて告白す

玉葱が滲みただけですほんとは

はしき足りない今日の気持ち虹になる

三位 道草 三点

甲斐加代子

どの句にも作者の過去が大きな重みを持つている気がする。いろんな生活から生まれる句の描写は、読者の心を離さない。句にもバラつきがなく安定している。

生涯は道草ばかり春りんどう

この風は父かも知れぬ青田風

もろこしの芯までかじる俳句論

自分史を少し美化して秋灯下

四位 淀みなき指 二点

本田 圭子

句に対する洞察力が深い。どの句にも作者の強い意志が見て取れる。

安易な妥協はないものの、若干句にバラツキがあるのが惜しい。次の句

に惹かれた。

フリージアの似合う家です空家です

日が暮れてまだくちびるに雛のうた

真夜中を赤い毛糸で埋めつくす

目と打つ淀みなき指笄返る



大根の花

井上 治

対象物をしっかり見ていることは、好感が持てるものの、安易な妥協が気になる。冗語を省くこと。視点の良いものは次の句

草に寝て離農淋しき四月尻
ふるさとが黄色に染まる麦の風

ゴツホ

畑 正彦

薄水を足で潰して不登校
卒業の来賓席に椅子がない
饒舌のあとの沈黙ビール注ぐ
晩年は月の沙漠で果てようか

ゴツホの視点で句を作るという意欲はすばらしい。もう少し内面を出して欲しかった。句がやや表面化しているのが惜しい。
六月の色クレパスに恋をする
ひまわりやゴツホ空より降りて来る

風が吹く河原

飯田 幸子

そのほか惜しくも今回は選外であったが、全応募句が魅力的だった。全作品について感想を述べたい。掲載は順不同である。

作者の立つ位置を考えると、自然に句が馴染んでくる。気負いのない表現が句の深みを増しているものの、安易な妥協が少し気になる。次の句に惹かれた。

八月をたどれば海となる炎
パンジーのそのまんなかに着地する
春宵や生きているからうろたえる

天花粉

森山 秀子

やさしい表現に安らぎを覚える。旧かなづかいも誤りない。俳句に向

村芝居

桐野 力

日常生活をうまく句にしている。思いやりの深さも感じるが、説明になっているのが気にかかる。心に残る句として

負の連鎖祭太鼓に紛れ込む
北窓を明けよ建国記念の日

生命と食に感謝

甲斐 素純

いろいろな生活観を、俳句にまとめているところはすばらしい。將軍も子規もタイトルに合って楽しい。惹かれる句は

一隅を懸命に生きて年暮るる
花野道どこまで行けば母に会う

虎落笛

福田 英子

さまざまの観点から作句されていることに好感がもてる。句が説明にならない工夫が必要である。冬耕や一畝遠く世間置き

淋しがる人を攫いに虎落笛

天花粉

森山 秀子

やさしい表現に安らぎを覚える。旧かなづかいも誤りない。俳句に向

き合う姿勢が良い。

廃校に金次郎ゐる春休み

更衣どのセーラーも風を生む

蝉しぐれ

田代 直之

どの句にも作者の強い思い入れが感じられる。無理のない表記が心に残る。

旅立ちの改札口や水温む
浮彫の闇の深さよ星月夜

母百六歳コロナ禍を生き

安森 範明

表記が旧かなづかいとなっている中で、一句に誤りがある。新かなづかいと考えば良いのだが……。ふるさとや煙突に虹かかりいて

(「い」×「ゐ」○)

竹林に木洩れ日拾ふ藪椿
不安げに飛石渡る夏帽子

いのちのエール

井上 則子

生活の営みが生き生きと句を通じて伝わってくる。素直な表現に好感が持てる。次の句が印象に残る。

口角を上げてまっすぐ夏に入る
雷鳴や雲にあしたを聞いてみる

ソクラテスの妻

平田千代子

視点が良く、構成も巧みである。平易な表記に好感が持てる。次の句が心に残る。

何も無い街に風花車ずぎる

かさかさと思考回路を舞う枯葉
街がみなピサの斜塔となる西日

侘助

原田 勝子

さまざまな視点からの作句が試みられているが、少し説明的になり過ぎたところが感じられて惜しい。

病葉に背中押されて居る余生
通り雨甘さ苦さも連れてゆく

少女の羽根

神 慶子

タイトルに惹かれる。日常生活の一端を句にまとめているもの、「昼寝さめ」「空蟬」の句など、安易に妥協した点が惜しまれる。

少女らに新しい羽根夏立てり
どんぐりのまだ青々と部活の子

曼珠沙華

灘波 瑞枝

日常生活を気負いもなく、うまく表現している。句全体が安定してお

り、説得力もある。

風に遊び花に遊んで老いる日々

日向ほこみずずの世界へ深入りす
一つずつ手離す齡秋の暮

さくらさくら

西峯 峰子

表記は旧かなづかい。全ての句に誤りはなく、構成に好感が持てる。

日記帳けふは一行さくら咲く
待春やきのふと違ふ風の音

地図の旅

佐々木 玉

句の内容が豊富で、読む人の心を

哀感を湛えた端正さ

一位 五点 「虎落笛」

福田 英子

死んだ子を又用水に沖繩忌

集団自決という日本軍の命令下、住民の四分の一が犠牲になった地上戦。その慰霊の日である「沖繩忌」。

しかし沖繩に米軍基地がある以上、沖繩忌は真の慰霊の日にはなり得ないだろう。

作者はそれを「死んだ子をまた用水」に投げ込むようなのだと言っているのだと私は受け取った。全広

揺さぶる。タイトル同様、作者と同行の風情が染しめた。

葦立ちや未だに抜けぬ反抗期

若葉風掬って帽子目深にす
残照を掬い取つたる冬の波

ぽかーんと青

読者をさまざまな場所へと誘う技
両が優れており、句にもバラつきがなく安定している。

松廣 李子

次の句が心に残った。

風鈴や胎内時計の違う母
睡蓮や久女の憂鬱などうふふ

ぱっくりと春付属品として胃ガン

伊藤 利恵

募作品の中で最も感動した一句。

消息を問へば秋天指しにけり
みな去んで仏とわたし盆の月

人攫いの銜ふ煙草や秋の暮れ
(銜ふるが正しい表記では)

葡萄吸ふその一瞬の孤独かな
淋しがる人を攫いに虎落笛

身近な人が他界したのであるか。哀感を湛えた端正な句が並び一編全体の佇まいは静謐である。

しじみしじみサ行のさみしじみ汁
だあれも柔ないオファンウータンの日永かな

音の重なりが美しく、この作者の言語感覚の素晴らしさがよくわかる句である。

それなりのキャリアのある人の作品抄と思う。「虎落笛」を読ませて

いただいた幸運を感謝します。

一位 五点 「淀みなき指」

十年の海に手向ける黄水仙
東日本大震災で犠牲になった魂への挽歌か。この句を中心に、失われたもののひとつひとつに花が添う。

本田 圭子

フリージアの似合う家です空家です
猫のいた瑕よその日上着我の花

牡丹一輪こんなに長い父の留守
折鶴がどつと翔び立つ石籬日和

紫陽花の花芯に残る海の色
などなど抑制の効いたよみぶりに

鎮魂の思いがあふれる。そして、二十句の真中には、

真夜中を赤い毛糸で埋め尽くす
という激しい句を置き、読み手の

心情にゆすぶりをかける。

秋の水飲んだキリンが朽ちてゆく
以下、終盤にたたみかけるように

力のある句を配置した構成も見事で、読み応えのあるよくまとめられた一遍と思う。

三位 二点 「ぼかーんと青」

松廣 李子

風鈴や胎内時計の違う母

よろず屋の退せし日めくり漱石忌

鼻眼鏡の熱爛ねちりねちり

骨拾う一部始終や春夕焼

ぱつくりと春付属品として胃ガン

など、安定した技量の佳句が並ぶ。

「鼻眼鏡の熱爛ねちりねちり」など、

そうそう書けるものではない。ただ

今回は二十句を通して読み手に訴え

かけてくるものが少し薄かったよう

だ。テーマを絞った連作の二十句も

この作者ならできるように思う。

期待したい。

四位 一点 「ソクラテスの妻」

平田千代子

ソクラテスの妻ら集いて年忘れ

悪妻を自認する女の集いは無敵で

あるう。コロナ禍があればなおさら

このような風通しの良い句がもう少

しあれば二十句にまとまりが出てく

ると思う。

薫塚の甘き匂いや宇宙基地

手袋が木の葉に戻る狐の子

一人ずつ消えて炎昼だけになる

などの句にも注目した。

四位 一点 「曼珠沙華」

灘波 瑞枝

荒神を祀る新藁選り抜きぬ

水仙を活けて座敷の静寂かな

着膨れて余生暇なく暮れて行く

味噌部屋の暗きにひそむ冷気かな

蛸や帰れない子に続く空

寺の鐘花菜明かりに溶けてゆく

作者の日々のていねいな暮らしが

りに郷愁が添う。新藁を燃やすことに

終わり始まる一年の美しさ。曆にあ

わせた日々は余分な迷いが少ないの

だろうか。作品も（推敲とは別に）

迷いの少ない立ち姿である。つくづ

くといいなあと思う。

その他、以下の作品に注目した。

「大根の花」

井上 治

草に寝て離農淋しき四月尽

「風が吹く河原」

飯田 幸子

友見舞うときの饒古春隣

「村芝居」

桐野 力

秋すんずん過疎にもまたまたある浮力

なたか挑戦してみませんか。（了）



「饒舌のあと」

稲田久美子

オノヨーコめく百均のサングラス

「きょうの虹」

陣野千恵子

母と娘の会話に啜まぎれ込む

「少女の羽根」

神 慶子

名画座を出て月光に包まれる

「道草」

甲斐加代子

吹く風に向き合うのれんななかまど

今回は応募作品が多く熱気を感じた。ところで、協会賞の応募作品は一年間の代表句をまとめたものがほとんどであるが（評中でもすこしふれたが）、新作二十句というのものがついてよいと思う。自分が俳句で何を表現したいかが明確になる。どなたか挑戦してみませんか。（了）



中山宙虫氏「霏霏II」

霏霏IIの会（会長・中山宙虫）は霏霏II冬号、春号をそれぞれ出版した。通算5号、6号になる。

令和3年1月に創刊号を出版して以来順調に推移し、誌面も充実してきている。先代「霏霏」創始者の星永文夫氏との距離感も絶妙。霏霏II諸氏の俳句作品だけでなく、選評や論文、エッセーと興味を持って読むことができ、しかもためになる。愛は苦しい鶏頭が染める雨霧のたびふとる昭和の亡霊たち帰ってこないメールは既読石蕨の花くつくつと鸚鵡が笑う枇杷の花（宙虫氏作・編集部抄出）

第24回 大分県現代俳句協会賞

応募作品抄

※事務局抄出（応募順）

「五七五にいやされて」大神 愛子
稲の花優しき風に踊られて

年の夜は糸が切れたる泣き上戸
霜月の父の命日焼酎の香
秋寂し子等の帰りを外で待つ

【奨励賞】

「大根の花」 井上 治

まっ白な大根の花農の花
蝉の声聞いて余命の指を折る
草に寝て離農淋しき四月尽
障子あけ襖もあけて青田風

「ゴッホ」 畑 正彦

里山に木洩れ日ゆらく春の水
せせらぎの風が生みだす赤とんぼ
ひまわりやゴッホ空より降りて来る
鋸屑の浮かびし風呂や父の夏

【奨励賞】

「風が吹く河原」 飯田 幸子

八月をたどれば海となる炎
身の丈に部屋を縮めて九月尽
コスモスの高さに風の吹く河原
友見舞うときの饒舌春隣

「村芝居」 桐野 力

憲法九条伸びて縮んで大蚯蚓
終止符を打つ日本ポンダリヤ剪る
敗戦忌マナーモードで過ごしけり
太閤忌駐在も出て村芝居

「生命と食に感謝」 甲斐 素純

一隅を懸命生きて年暮るる
花野道どこまで行けば母に会う
寒卵割ればにこに「黄身二つ
蕨出す童の如き手を伸ばし

「天花粉」 森山 秀子

何事も起こらぬ村の春一番
散歩道摘んでくるくる薺の花
十薬を干して杉山けぶりけり
日田杉の下駄を鳴らして良夜かな

「蟬しぐれ」 田代 直之

七歳の姉の遺影に聖夜来る
鼻や闇に孤独を放ちをり
空を切り明日を啜える夏燕
通草買ふ売り子は二十歳過ぎし頃

【敢闘賞】

「淀みなき指」 本田 圭子

夏薊摘まれるときは目を伏せる
フリージアの似合う家です空家です
きしきしと新聞で拭く暮の窓
牡丹一輪こんな長い父の留守

「母百六歳コロナ禍を生きて」

安森 範明

リモートの母の微笑枇杷熟るる
ワクチンの接種日決まり梅雨に入る
竹林に木洩れ日拾ふ藪椿
一瞬の化粧の匂ひ酔芙蓉

【奨励賞】

「きょうの虹」 陣野千恵子

日が暮れて途方に暮れる柿落葉
冬服を脱ぐときのつべらぼうになる
突然の陽射しにひるむ露の臺
月光にもどる途中の黄水仙

「いのちのエアール」 井上 則子

鉄線花いのちのエアール空に向け
口角を上げてまつすぐ夏に入る
万緑や背すじはピンと古希に入る
災いはここに置きます去年今年

【奨励賞】

「ソクラテスの妻」 平田千代子

どんぐりの弾けて空の音しきり
手袋が木の葉に戻る狐の子
ソクラテスの妻ら集いて年忘れ
生国の訛りで来たる空つ風

【奨励賞】

「侘助」 原田 勝子

ワクチンの列に思案の夏に入る
夏風邪に人目憚る咳一つ
初東風や行き交う人の速会釈
侘助や息を潜めて老いてゆく

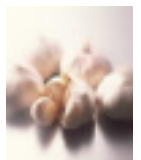
【奨励賞】

「激動の昭和を」 下司 正昭

あの夏を壕に飛び込む小国民
機関士の西日にかざすタブレット
アルバムの母のものんべに銃後あり
激動の昭和を生きて柿落葉

「少女の羽根」 神 慶子

辿り着くここがまほろば花の昼
少女らに新しき羽根夏立てり
名面座を出て月光に包まれる
どんぐりのまだ青々と部活の子



【奨励賞】

「曼珠沙華」 灘波 瑞枝

荒神を祀る新葉選り抜きぬ

遠き日の父の記憶や野の苺

蛸や帰れない子に続く空

過去となる今日という日の曼珠沙華

「地図の旅」 佐々木 玉

葎立ちや未だに抜けぬ反抗期

半島の地図をふるわず桜東風

若葉風掬って帽子目深にす

初みくじ旅は東へ吉とあり

【奨励賞】

「ほかーんと青」 松廣 李子

キリストの何も語らぬ種下ろし

風鈴や体内時計の違う母

よろず屋の退せし日めくり漱石忌

卒業の夜の人体解剖図

寄稿 II エッセイ II
「生死一如の花吹雪」 河野 輝暉

葉桜が美しい。

でも今年の桜は例年よりいつまで



も咲いていたと思ったのは私だけではない

ことか。否、そうではなく、世

の中には三日見ぬ間の桜かな、とい

うフレーズの表す哀惜の念をも味わ

いたがったのかも知れない。

満開の花を賞でると同じく、日本

人の鑑賞傾向には、飛花落花の美学

が特徴的である。仏教が特に浸透し

た鎌倉時代から生者必滅の無常観と

融合したと言われる。更に松竹梅は

神々の依代で芽出たい神道的アニミ



て自刃。その辞世の一首こそ

「散りぬべき時知りてこそ世の中の

花も花なれ人も人なれ」だった。平

明深奥のドラマ。

俳諧の方だが「風流の初めやおく

の田植うた」があり芭蕉作。「まく

り」で威勢のよい予祝と豊作祈願の

歌だったろうが、その裏には天災、

虫病、重労働への怖れが混じった勞

働歌であったであろう陰影が潜む。

芭蕉の農事への深い共感が尊い。

人生に通過儀礼がある。帯祝い、

出産祝い、七五三、成人式など。神

社に参詣して祝う。だが祝賀の気持

ちの中に無意識としても、行く先の

畏怖感がかすかに揺曳している。

拙句で恐縮だが「生きている亡き

子の顔や秋灯」がある。この句を裏

打ちする様な新聞記事に出合った。

「生まれたての赤ちゃんは、美しく

目映ゆかった。一方で完全な死を生

んでしまった。生と死が背中合わせ

に」と。

以前「種袋ふれば命の音がする」

類句が蔓延ったことがある。これに

「種袋ふれば賑やか死の音も」とし

て私は反駁した。哀楽の果てに昇華

されたシンクレティックな美。これこそが芸術の神髄ではないかと思う。

(了)

令和四年 第一回雑詠句会 結果発表

【25点】

逝きし子の歯ブラシ乾く半夏生

河野 則子

【20点】

木枯しが隙間だらけの村抜ける

谷川 彰啓

【14点】

アクセルをぐいと踏込み冬に入る

陣野千恵子

【13点】

いぬふぐり待つて父の田手放せり

足立 町子

【12点】

虎落産平和のきしむ音かしら

白土 正江

廃校に金次郎ある春休み

森山 秀子

【11点】

田周率みたいにくる蟻の列

岸本千鶴子

【10点】

爆音子とひらがなのような日が過ぎる

灘波 瑞枝

錆びてなお昭和を語る斧始め
着ふくて他人の顔になつてゐる

甲斐加代子

南瓜煮る母の背中の中豊かなる

菅 登貴子

上田たかし
ポインセチアのまつ赤な嘘を肩抜けない

本田 圭子

【6点】
自分史を留し込めながら恵方巻
日だまりににんまりと在り冬すみれ

甲斐加代子
赤峰佐代子

落葉掃き一葉一葉の声を聞く

足立 鶴男

倦怠のかたち割れる鏡餅

足立 攝

春眼を黄泉の寢床にして逝きぬ

河野 則子

すかんぼや昭和すつぱし今も尚

岸本千鶴子

ふるさとの村は枯野に天の風

御手洗豊海

音も無く皆で右向く枯れ尾花

岡村 君香

【7点】
今日を泣き今日を笑つて晦日蕎麦

嶋末 洋子

【5点】
春キャベツもうすぐ羽化が始まり

足立 攝

兜太かなおいと顔出す春の山

有村 王志

寒林橋独り居の部屋明るうす

白土 正江

嚏してうわさの中にある私

西峯 峰子

有り体に生きて蟻螂枯れゆけり

田中 充

山眠るコペルニクスのてのひらで

平田千代子

六郷の仏とうとうと菜種梅雨

福田 英子

すんなりと言葉出てこずおでん煮る

早澤まり子

生と死のリズムとこしえ花吹雪

立麻 琴路

寒夕焼波の向こうは戦の火

白土 正江

突きぬけた壁の向こうや大且

赤峰佐代子

片言の会話の弾むお年玉

時松由美子

アフガンの一隅照らす冬の月

田中 充

【8点】

みどり児の両手がつかむ寒の空

足立 攝

手袋を外してきみと手をつなぐ

佐藤 珠幸

湯豆腐をつつきこのごろ人嫌い

上田たかし

冬すみれ生涯産土しか知らず

西峯 峰子

石露の群れるあたりで母を待つ

坂本 一光

答えない問いばかりして水凍る

神 慶子

幸せのどこどころに石露の花

松廣 李子

嘘をつく夜は冷たき膝頭

立麻 琴路

れんげ田に座れば昭和香りくる

立麻 琴路

【10点】

足立 攝

【10点】

足立 攝

海に出て葬列につく鱗雲

河野 泉

蒲の穂の揺れてかすかな偏頭痛

平田千代子

冬の田にヒツチコックかカラス舞う

井上 則子

迎え火を揺らして帰る茄子の馬

河野 則子

【4点】
過ちを赦すがごとく鹿啼けり

東 香代子

逝く秋を追いかけていく一人旅

早澤まり子

春を着るヘルパーさんの身の軽さ

加藤 征孝

きつねぎの峽は傾きつつ明ける

上田たかし

開戦日百三歳の記憶聞く

佐々木 玉

海鼠腸のこの呼び方が私好き

東 香代子

大根やまあるく擦ればまるい味

安森 範明

老二人冬の一樹の象かな

有村 王志

埋火のその哀切を友とする

小野みち子

冬空を押し上げ隣家の棟上る

鎌倉真由美

土つきの大根提げて立ち話

東 香代子

指切りのあの頃いくつ桜貝

田代 直之

手袋をはめて気がつく右左

衛藤 俊一

永ふや幾千萬の踏絵して

福田 英子

夕暮れの棚田放棄地を揺れ

竹下美津子

第41回時雨忌（芭蕉忌）全国俳句大会

東京都江東区の芭蕉記念館より、

事務局に投句依頼が来ていますので紹介します。

●投句単位二句一組、何口でも可。

※ただし1句は芭蕉を忍ぶもの、または「生」がテーマのもの。あとの1句は自由です。未発表に限りです。

●投句締切は7月31日（日）必着

●投句料2句一組につき千円。同封。

●規定の用紙、またはA4の用紙に記入のこと。性別年齢を明記する。

●投句先・東京都江東区常磐1の6の3江東区芭蕉記念館全国俳句大会

●受賞式は10月10日芭蕉記念館

●応募用紙はダウンロードできます。「江東区芭蕉記念館」で検索。

第59回現代俳句全国大会

作品募集

投句締切は
8月1日
(必着)

◆応募規定◆

□投句料3句一組・2千円、何組でも可。

ただし、新作未発表作品に限る。「3組9句同時投句に限り、6千円を5千円にいたします」

前書き不可。所定用紙使用。〒、住所、お名前、電話番号、協会員・会員外の別を明記。

投句料は普通郵便、定額小為替(無記名で)、現金書留(必ず作品同封の事)、又は郵便払込(郵便局の青い払込取扱票をお使い下さい)加入者名・福岡県現代俳句協会、振替口座番号・01770141149862・振替払込受領書のコピーを投句用紙に必ず貼付してください。

□送付先 〒807-0827 福岡県北九州市八幡西区楠木2-6-12 現代俳句協会全国大会事務局 福本 弘明宛 ☎093160216058

□締切 8月1日必着

□顕彰 協会の会員誌「現代俳句」に優秀作品を発表するほか、協会刊行物に採録。

□賞 大会賞、後援団体賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作賞。

□全国大会 令和4年11月12日(土)午後1時より、JR九州ステーションホテル小倉 〒802-0001 福岡県北九州市小倉北区浅野1丁目1-1 ☎093154117111

□記念講演 平出 隆 先生(詩人、多摩美術大学名誉教授)「蕪村を中心に」

□講師 中村和弘会長はじめ協会幹部

□懇親会 午後5時より(会費6千円)

玖珠郡九重町・宝八幡宮

「アジサイ祭」の経緯について

宮司・甲斐素純氏が「一所懸命」出版

平成14年に始まった九重町・宝八幡のアジサイ祭は、地元住民だけでなく広く大分県の風物詩として多くの人に支持されてきたが、令和元年の開催を最後として惜しまれながら幕を閉じた。宮司甲斐素純氏の自史的記録誌「一所懸命」の中から、アジサイ祭俳句大会の顛末の部分を紹介する。



稲澤由記NHKキャスターと甲斐素純宮司

……古都奈良や京都・鎌倉の寺々には、アジサイの名所が点々とあり、シーズンにはテレビ放送もあり別名「アジサイ寺」とも称されていた。宮司としては、当社を「アジサイ神社」にしたく、こつこつと努力してきたのである。

……ある程度の数もそろったし、「アジサイ祭」をしたいとの思いがつゆり、月次会の会長岩下恒之先生以下数十名の同志と協議し、平成十四年六月二十三日第一回紫陽花祭を開催した。

神社で催す以上、総代会との共催というところで始まり、花の盛りの六月第三日曜日（後に七月第一土曜日に変更）に実施した。祭に当たっては、三つの柱を立てた。第一はアジ

サイ俳句大会、第二は即席写真コンテスト、第三は奥の院への参道草刈りである。

第一の俳句大会は、「九重の女芭蕉」とも呼ばれた恵良の駒走松恵氏の存在の大きさである。あの有名な江戸中期の俳人松尾芭蕉の孫弟子に、「長野馬貞」がいる。馬貞は、九州でも名を成した俳諧の師匠。

馬貞の墓のすぐ下に住む駒走松恵氏は、墓守をしながら彼女自身も俳句に熱中した。多くの秀句を作り、各新聞にまた全国俳句大会へも数多く投句し、大会賞も大分合同新聞社・読売新聞社の年間賞も獲得した。長野馬貞に続く、九重町が生んだ女流俳人である。

氏子でもある松恵氏は、馬貞以来

の伝統を守り継ぐと、寿大学や老人会、地元で俳句グループを結成し、積極的に句作りを指導した。また九重町の教育長でもあった恵良の麻生良昭先生も、俳句作りにたけていて（漢詩・詩吟など多才）、この両先生を宝八幡宮の紫陽花俳句の地元選者として、お願いした。

賞の内容は、大賞・準大賞・九重町長賞・大分合同新聞社賞・宮司賞・選者賞をはじめ、八鹿酒造株式会社など各スポンサーの賞などを多数用意し、「投句料はなし」ということから皆に喜ばれた。

また大分県的な広がり求めて、権威ある大分合同新聞の俳句選者河野輝暉先生に、最終選者を努めていただいた。先生は元高等学校の校長で、現職の神官さんでもあった。平成二十五年十月の第五十回全国現代俳句大会では、一万五千四四四句の中から一席（雑煮食うも骨をひろうも箸の国）に選ばれた程の俳人。当宮の紫陽花祭俳句大賞以下優秀賞の選評には、定評があった。……紫陽花大賞は、木柱の句碑を毎年境内に建立してきた。

河野先生は、第十七回からは高齢ということで、選者を勇退された。そこで、大分合同新聞の後任選者た

る谷川彰啓先生へ当社の選者を依頼し、快くお引き受け下さった。

◆社報「大地」に掲載されたアジサイ祭終了についての文書

……昨年は新年早々より、「新型コロナウイルス」の蔓延にて日本中（世界中）がその対応に追われ、未だ終息の目途がただない中で大型イベントが全国的に次々に中止を余儀なくされていることは、既に新聞・テレビ等の報道にてご承知のとおりであります。

全国の各種団体が自粛する中で、当宝八幡宮の七月第一土曜日のアジサイ祭、第十九回目を昨年は中止いたしました（俳句募集とポスターの印刷は終了していたのですが……）

いづれにしましても新型コロナウイルスの影響は多岐に亘り、大規模です。経済に与える影響も計り知れないものがあり、景気の低迷も数年はかかるとの専門家のご意見もあります。

これまで十八回に亘り、アジサイ祭を陰になり支えて下さった「月次会」・「総代会」の皆様を始め、敬神婦人会や俳句選者の先生方や俳句仲間、そして各社スポンサーとして運営資金・賞品をご提供下さいまし

た八鹿酒造KK、新成建設KK、珍珠N OKKK、白山工業KKを始め各福祉施設など等、この紙上をお借りして感謝とお礼を申し上げます。

また紫陽花の下草刈りと剪定作業。テント張り、役場での写真・俳句展示作業、妙見社参道の下草刈り、当日の炊事（昼食作り）、俳句の入力と選句作業・発送・賞状作り・短冊書き……その準備から終了まで、皆様のご加勢・ご協力を戴きつつ、相当のエネルギーを注入してきました。長い間アジサイ祭に関わってこられた多くの皆様方のご協力・ご理解・ご宣伝のお陰で、当宝八幡宮も大分県を代表する紫陽花の名所として、

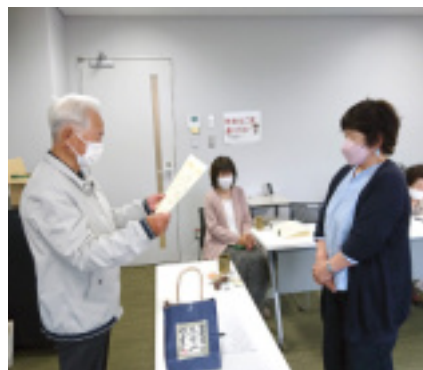
マスクを含め一般の方々にも周知されるようになりました。

「新型コロナウイルス」の影響も大いにありますが、本年五月には、宝八幡宮として最大の特殊神事、十三年に一回の「御神衣祭」が控えており、準備も多岐に亘ります。ゆえに俳句募集とその整理・準備など等、物理的にも事務処理能力を超えてしまいます。

諸処のことを勘案して、第十八回アジサイ祭をもちまして終了させていただきました。皆様方には、暖かいご理解を賜りたく存じます。

感謝再拝

三重町「狩野句会」年度賞の表彰



上田会長から表彰される鎌倉真由美氏

豊後大野市の狩野句会（上田たかし会長・会員27名）は昭和21年に創立した老舗的俳句会です。意欲ある会員の秀句を顕彰する目的で、平成30年に年度賞が設けられました。今年5月、4回目となる年度賞が発表され、以下の方が受賞しました。

【年間最優秀賞（一席）】
試着室出てきて春をふりまきぬ
足立 町子

【年間秀逸賞（二席）】
落葉焚く心の芥くべながら
吉田 素子

陽炎やいつの昔にもどろうか
稲田久美子

【年間優秀賞（三席）】
窓を開け珈琲カップで春を飲む
佐藤 珠幸

指先に君を残して秋に入る
陳野千恵子

夏帽子着められ三歳若く言う
難波千代美

【足立撮影年間賞】
マスクよりはみ出す欠伸春の暮れ
岡村 君香

おじさんがくるくる回す日傘かな
衛藤 俊一

【新人賞】
カーテンの隙間から来る立夏かな
虚栗踏んであの日と決別す
(二句) 赤嶺 広史

【特別賞】
春風や佛になれぬ鉤屑
梶原 千代

友の句に励まされつゝ秋をゆく
重石美代子

【上田たかし年間特選句】
濁り酒二口目から女です

鎌倉真由美

《新会員紹介》

牧野 桂一(大分)

仙厓の声かも知れぬ穴惑ひ

園田 武子(大分)

花の目をスマホに潜る反抗期

諸富 幹夫(国東)

吊橋の揺れ軽やかに花吹雪

岡野 紘宣(国東)

母の日や女系で揃う四世代

《逝去謹悼》

梶原 千代

(2月17日逝去・享年90歳)

佐土原 孤雁

(2月8日逝去・享年93歳)

山口 睦子

(3月8日逝去・享年89歳)

《退会》

鹿島侑一・白水風子・東香代子

《発展基金協力者》

※一口千円で受付中

・赤峰佐代子……………二口

・有村 王志……………三口

・井上 則子……………三口

・井上 政人……………一口

・上田たかし……………二口

・大神 愛子……………五口

・梶原 千代……………十口

・加藤 征孝……………四口

・鎌倉真由美……………二口

・桐野 力……………三口

・倉迫 順子……………十口

・幸谷 恵子……………三口

・河野 輝暉……………五口

・河野 則子……………五口

・児玉 利子……………一口

・坂本 一光……………一口

・佐々木 玉……………三口

・佐藤 哲夫……………五口

・菅 勲……………六口

・瀬川 剛一……………八口

・立麻 琴路……………三口

句会探訪 ⑫

国東俳句会 桜吟行

国東俳句会は令和元年の5月に一度紹介しました。その後も指導の河野輝暉氏

(大分県現代俳句協会顧問・元会長)の意欲、体力が衰えず、この三年間に若手を含む新人が多数入会しています。

「何より大切なのは商品として小ざれいに洗われた野菜より、少しくらい泥が残っていても、実質本位のもを魅力的と思う、その野太い実感力を身につけること」というのが河野輝暉氏の変わらない指導理念です。

句会は毎月第一金曜日、午前



十時から正午まで国東中央公民館で開催されます。行事は一月に新年俳句会・懇親会、春に吟行句会、秋に町内の文化祭に参加します。さて、今年も国東俳句会の会

員一行は四月六日、春光も目映い「梅園の里」で、恒例のお花見吟行会を催しました。場所は豊後三大偉人と崇敬される三浦梅園生家の近くで、安岐町の山峡。写真のように公園として整備されています。

ウクライナの戦火はるかに吾は花に (英子)

を始め秀作に励み、和み合って花の詩人のひと時を過ぎました。(この欄の事を募集中です)



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村 王志

《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝方

TEL. & FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://gendaihaiku.net>

E-Mail: info@gendaihaiku.net



令和四年五月三十一日発行
会報第百二十五号
発行人・有村 王志
発行所・大分県現代俳句協会
編集人・足立 攝

・谷川 彰啓……………三口
・谷本 親史……………三口
・永松佐世美……………一口
・灘波 瑞枝……………二口
・早澤まり子……………一口
・久枝 花城……………二口
・匿名希望……………三口
(以下多数につき次回掲載。甚謝)